



ガドテリドール造影剤の有害事象に関する、 韓国の前向き多施設共同研究

J Magn Reson Imaging, 2019

造影MRIに用いられるガドテリドール造影剤を承認用量で使用する場合、有害事象(AE)の発生率は極めて低く、安全であるとする報告が、「Journal of Magnetic Resonance Imaging」10月29日オンライン版に掲載された。

ガドリニウムベースの造影剤(GBCA)はかなり以前から、特にヨード造影剤と比べると、AEが少なく安全性は比較的高いとみなされてきた。ところが、GBCA使用に関連する腎性全身性線維症(NSF)例が2006年に報告されたことをはじめとし、ガドリニウムが脳や体の組織に残留して健康に悪影響を及ぼすのではないかという懸念が近年にわかに高まっている。

そこで、高麗大学校(韓国)のSung Bum Cho氏は、2014年12月31日から2018年5月8日まで、韓国の19施設から集めた6～93歳の患者6,163例(平均年齢56.7±15.4歳、57.3%が女性)を対象に前向き観察研究を実施。通常行われているMRI検査において、環状型ガドリニウム系非イオン性造影剤のガドテリドールを承認用量で用いた場合(今回は平均0.108±0.02mmol/kg)の急性AEの発生頻度と重症度を調べた。なお、同剤の韓国での推奨用量は0.1mmol/kg(0.2mL/kg)である。

ガドテリドール投与からMRI検査終了後少なくとも30分までの全てのAEを観察。AEを重篤と非重篤とに分け、重篤AEは「死亡、生命を脅かすもの、入院または入院期間の延長を要するもの」、非重篤AEは、軽度(障害・機能不全なし、自然消失)、中等度(障害・機能不全なし、要治療)、重度(一時的かつ/または軽度の障害・機能不全あり、要治療)に分類した。AEの重症度およびそれが同剤と関係しているか否かの判定は放射線科医が行った。

その結果、13例(0.21%)に19件のAEが生じたが、重篤および重度のAEは認められなかった。これら19件のうち、ガドテリドールに関連すると考えられたAEは、10例(0.16%)の患者で生じた15件であった。さらに、これら15件のうち8例(0.13%)に生じた12件のAEは軽度で、すぐに自然消失した。残りの男性患者2例(0.03%;60歳、68歳)に生じた3件のAEは中等度で、過敏反応によるものであった。両患者ともMRI検査を受けるのは初めてで、過敏反応はガドテリドール投与後20～30分で生じ、抗ヒスタミン薬とステロイドによる治療で45～60分以内に解消した。最頻のAEは軽度の吐き気と嘔吐であり、全体としては3例の患者(0.05%)で報告され、ガドテリドールに関連すると考えられた15件のAEの中では6件(40%)を占めた。

これらの結果から、著者らは「ガドテリドールは造影MRIにおいて安全なGBCAの1つである」と結論付けている。

- (1) メディカルカスタムコンテンツは、AJ Advisers LLCが制作、株式会社プロウエーブが編集(編集協力AJ Advisers LLC)した記事です。情報の正確性については万全を期しておりますが、各制作・編集社は、利用者が本記事の情報をを用いて行う一切の行為について何ら責任を負うものではありません。
- (2) 本記事の内容及びメディカルカスタムコンテンツのロゴの無断転載・配布を禁じます。
- (3) 掲載されている薬剤の使用にあたっては添付文書をご参照ください。